

不当逮捕

本田靖春

|著者|本田靖春 1933年、京城に生まれる。1955年早稲田大学政経学部新聞学科を卒業し、読売新聞社に入社。社会部勤務、ニューヨーク特派員などを経て1971年退社。著書に『現代家系論』『日本ネオ官僚論』(正・続)『私の中の朝鮮人』『ニューヨークの日本人』『体験的新闻紙学』『私戦』『誘拐』『疵』『村が消えた』などがある。

ふとうたいほ
不当逮捕

ほんだやすはる
本田靖春

© Yasuharu Honda 1986



講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

昭和61年9月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——東洋印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫二)

ISBN4-06-183837-7 (0)

文庫

不当逮捕

講談社

不当逮捕

1

雨には不吉の臭いがする、などと、気のきいた風なことをいつてみたところで、しよせん後からのこじつけでしかない。

だが、降られると無性に気が滅入る。そのうち、何かよからぬことが持ち上がっても不思議でない、といった投げやりな気分になせられる。ことに長い雨はいけなない。

昭和三十二年十月二十四日も、たまたまそういう一日であった。

東京地方はこの季節につきものの不連続線の影響で、夜に入ってから断続的な雨が止まず、本所警察署に設けられた監視庁第七方面の記者クラブに一人居残っていた私は、木製の長椅子を二つ並べてその上に仰向けになり、身の振り方を決めかねていた。

社から車を回してもらって家へ帰れば済むことだが、翌朝また雨の中を杉並からやってくることを考えると億劫さが先に立ち、かといって記者クラブで夜明かすするのは、いかに気ままな独身者にしても少々侘びしい。

記者クラブといえは聞こえはいいが、庁舎の正面を入れて左手に続く廊下の行き止まりをベニヤ板で仕切った、二坪にも満たない殺風景なスペースで、抽斗ひきだもついていない名ばかりの机がその半ばを占め、やがてこれを炬燵こたに代用するための準備として、毛足があらかた擦り切れてはげ

ちよろけになった毛布が掛けてある。

その下の火鉢に炭火がおこっているのならまだしも、明け方の冷え込みは避けられないであろう。

日付がかわって、なお帰るとも泊まるとも踏ん切りがつかずにいたところ、事務室をはさんで反対側の交換台から、当直員の声が掛かった。

「ヨミさん、まだいますかあ。電話ですよ」

机の隅に警察電話がのっている。仰向けのまま受話器をとると、いつになく急ぎ込んだN紙の平岩正昭の声が耳元で響いた。

「あ、まだいたの。いてくれてよかったよ。和ちゃんがばくられたぞ」

私は思わず起き上がって口走っていた。

「そんなばかな」

「ばかなっていったって、現にガラがこの下に入っているんだもの」

平岩は警視庁第一方面の担当で、丸の内警察署内の記者クラブに詰めている。その地階の留置場に、私の職場の先輩にあたる読売新聞社会部の立松和博の身柄が入れられたというのである。

私はふたたび同じ台詞を口にしていった。

「そんなばかな」

立松がかかわった報道に対して名誉毀損の告訴が出されていることは、入社から二年半のかけ出しで、部内では半人前扱いがやつの私も耳にしていた。しかし、逮捕状の執行に基づく身柄

の拘束は、当該する被疑者に証拠湮滅もしくは逃走のおそれがある場合を原則としており、立松のケースはそのどちらにもあたらない。

問題はすでに配布された新聞の記事が、そこに名を挙げられた人物の名譽を毀損したかどうかであつて、証拠を湮滅しようにも出来るわけがなく、強盗や殺人犯ならいざ知らず、新聞記者が告訴を受けたからといって逃げ隠れするはずもないのである。

私の記憶するかぎり、俗にいう暴露雑誌やごろつき新聞に関する二、三の例は別として、社会的に認知された新聞社の記者が、名譽毀損容疑で身柄をとられたためしはない。

「無茶苦茶じゃないですか」

語氣を強める私に、平岩はさらに意外な事実を告げた。

「そんなこといわれたつて、おれ知らないよ。文句は高検にいったら」

「えっ、ばくつたのは高検なんですか」

「そうらしいんだ。丸警じゃ高検からの預かりだといつてる」

「なんでまた、地検の頭越しに、いきなり高検が——」

「だから、おれは何も知らないつていつてらだろ。そんなことより、すぐ来てくれないか。いまさつき靖子さんから電話があつて、彼女、おたくの社にいるんだけど、間もなくこっちへ差し入れにくるつていうんだ。君、ついてて上げなさいよ」

「そりゃ、行くには行きますけど、ばくみたいな若造の出る幕じゃないでしょう」

「じゃあ、社の違うおれなんかどうなるのさ。和ちゃんとは、君も知つてる通りのつき合いだ

よ。しかし、それとは別じやないの」

平岩は少年時代から立松家に入入りしている。そもそもこの私を、社歴が離れていて近寄りにくい存在であつた立松に引き合わせてくれたのも、彼なのである。

しかし、自身が認めているように、表立っては他社の人間であり、彼にだけ立松と妻靖子の面会の段取りを押しつけるわけには行かない。

「どうでもいいけどさ、ヨミさんって随分冷たい会社なんだな。このどしや降りの中に、いきさつはどうであれ社のためにとつつかまつた社員のカミさんを一人ではっぱり出して、だれも面倒みないんだから。偶然、おれが帰りそびれてここにいたからいいようなものだけど、もしなかったら君にも連絡がつかないし、靖子さんにどうしろっていうんだらう。

ともかく、すぐおいでよ。そのあいだに、とりあえず、面会させてもらえるかどうか、下に行つてあたつてみるから」

平岩にいわれて、吹き降りの中をタクシーで急ぎながら、私には何から何まで解せないことばかりであつた。

それもそのはずである。

検察部内の奥深く、その最高権力の座をめぐつて対立して来た二派の一方が、立松逮捕を突破口に相手方の勢力を一気に突き崩そうとして仕組んだ暗闘劇の筋書など、記者経験の浅い私に見抜ける道理がない。

皆目見当のつかないまま丸の内警察署に乗り着けると、ちょうど靖子が正面玄関の庇の下に細

い身体を寄せて、皇居の堀端から横殴りに吹きつける風雨を避けながら、畳んだ蛇の目の傘を払っているところであった。

西銀座三丁目の読売新聞社からは歩いて也十分がせいぜいの距離ではあるが、不意に夫を引っ張られて動顛しているに違いない靖子を、雨の夜更けに一人でやるのは、平岩がいう通り随分冷たい仕打ちではないか。

「社会部の人間はだれもついてこなかったんですか」

「どなたもお忙しそうでしたから、私、義母を残して、そっと——」

「一人くらい気をきかせて、せめて車を出せばいいのに」

独言のようにしている私に、靖子は色白の顔を心持ち左に傾け、いつもの笑みを浮かべて見せたが、その表情に張りがあるはずもなく、雨ゴートが濡れてはりついた瘦身の和装の肩が、気のせいかいっそう尖って見えた。

仕事の面でも私生活においても、まさに型破りの立松を夫に持ったばかりに、気苦労の絶えることのない靖子だが、その夫の後にくっついて、しばしば深夜から明け方にかけて押しかけて行き、ときならぬ食事の面倒をかけたりする私としては、とってつけたような慰めを口にするのが憚られる。

先に立って地階へ降りて行くと、刑事課の大部屋に平岩がいて、そのかたわらから刑事課長が挨拶を送ってよこした。

「ご苦労さんです」

私はその年の七月に第七方面に配置替えになるまでの一年間あまり、第一方面を担当していた。だが、私の受持区域はそのうちの港区に相当する部分で、ふだんは愛宕警察署の記者クラブに詰めていた。あとの千代田・中央両区は先輩記者の領分であり、私は彼の休日になそこをカバーしていたに過ぎない。したがって、先輩記者の持場である丸の内警察署の刑事課長とは、やっと顔見知りといえる程度の間柄なのである。

タクシーの中でそのことが気にかかり、交渉の難航を予想していた私は、彼の愛想のよさに救われる思いであった。

「奥さん、ご心配ですね」

刑事課長は廊下にたたずむ靖子を招き入れると、控え目な口ぶりで念を押した。

「本来ならば私どもの一存ではまいらないんですが、他ならぬクラブを通してのお話ですし、ご事情がご事情のようですから、早速お引き合わせします。ひとつ、そのところだけ含んでおいていただけますか」

ほどなく現れた立松は、明らかに面会人を予期していなかった様子で、入口の敷居へ来てわれわれの姿を認めると思わず足をとめ、一呼吸あつてから、場違いに陽気な声を上げた。

「よおっ！」

彼はそのついでに、威勢よく両手を差し上げたものだから、留置に際してベルトを抜き取られてしまったズボンがずり落ち、あわてて引き上げにかならなければならなかった。

立松が事件と自分とのかかわりについて活字にしたものとしては、『世界』の昭和三十三年一月号に寄せた談話筆記が残るだけである。それによると、生まれて初めての留置場入りは、いかに事件を扱い慣れているとはいっても、かなり勝手の違う体験だったようである。

型通りの手続が終わって、雑居房に案内されたのは、逮捕当日の午後十一時過ぎであつた。

「おい、高検の預かりをもう一人入れてくれよ」

係官の声でもぞもぞと起き上がった先客三人のうちの見るからに愚連隊風が、いきなりわめき出した。

「無理いっちゃいけねえ。この狭いところに新入りまで詰め込もうってえのかい。ひとつ、どうやって寝るか、手本を示してもらおうじゃねえか」

その権幕に気圧された立松が通路で立ち往生していると、気のよさそうな別の一人が、愚連隊風をなだめにかかった。

「いいじゃないか。今夜一晚のことだろう。なんとか無理しようよ」

係官に促されて、立松は房の片隅に居心地のわるい座を占める。ところが、係官が立ち去ると、愚連隊風はそれまでの不機嫌はどこへやら、打って変わって丁寧な物腰を示した。

「なあに、あいづらにはときどき気合を入れたい方がいいんですよ。今夜は、おたくさんもおいらっちも、どうせ窮屈で寝られやしない。まあ、お互いさまだから、辛抱してやって下さい」
どうやら彼は、深夜の新入りが高検からの預かりと聞いて、一目置いたようである。いずれカツアゲか何かで挙げられた小物なのであろう。

「おたく、高検の預かりつていうと、控訴審ですか」

「いや」

「そうすると、最高裁からの高裁差し戻しつてわけかな」

「そんなんじゃないんだ」

「あと、何があったつけ」

「いきなりの高検特命捜査」

「へえっ、大物なんですね、おたくさん」

彼はがぜん興味を惹かれたらしい。

「ばかにビラ（服装）は張ってるし、そのくせおいらのチョウウフ（隠語）は通じるし、おかしな人だなあ。商売はなに？」

「一種の会社みたいな、団体みたいな……」

「で、何やったの。罪名は？」

「それがへんてこなんだよ。名誉毀損というようなことなんだがね」

「つまり、政治犯つてわけか」

立松としては、折角、同房者がへり下つてくれているのに、身分を明かすと掌を返したような扱いをされそうに思えて、適当に煙幕を張り続ける。

「昔、フランスにドレフュス事件というのがあったの知ってるかい」

モサ（すり）で捕まったといういちばん若いのが、素っ頓狂な声を出した。

「うん、知ってら。ジャン・バルジャンの弟のことだろう」

それで得心が行くはずもないであろうに、やがて三人は横になって寝息を立て始めた。つい先刻、寝られやしない、といったのも、どこ吹く風である。

ふだんから睡眠薬の助けを借りないと寝つけない立松は、隅っこで膝を抱え、破廉恥罪を犯したわけでもないのに、彼らと一緒に夜を過ごそうとしている、自身の上に降って湧いた事態を受け止めかねていた。それこそ、得心の行くものではない。

そこへ係官がやって来た。

「四十番、調べ」

自分の留置番号である。

時刻はとうに午前零時を回っている。これから調べなどあり得ようはずがない。高検の緊急会議か何かで、釈放が決定されたのだろう――。

呼び出しを受けて、立松がそのように樂觀的な考えを抱いたというのは、検察の内部事情に通暁している彼も、自分の置かれた状況の深刻さを、まだ完全には理解出来ていなかった証拠である。

「あなた、とんだことになっちゃったわね」

立松は釈放の期待が裏切られたところからくる軽い落胆を、陽気に振る舞うことで覆い隠したつもりであつたろうが、彼を迎えた靖子は両腕で抱える風呂敷包みに華奢なあごを埋め、たちま

ち涙声にかわった。

「社からご連絡があつて、着替へと毛布を持って来たの。出掛けに良城よしぐさにきかれて、パパまた入院するのよ、つていったら、またおなか切るの？　ばくいやだ、つて泣き出して……」

良城というのは、二人いる息子の下の方で、四歳になる。

立松は立ち会いの刑事課長を意識して、靖子の口を封じた。

「お前がいろいろ話をする、警察にご迷惑がかかるんだぞ。伝言は後から係の人にお問い合わせから黙って聞け。」

いいか。いまのおれは、とくに食いたいのものもない。暑くも寒くもない。だから、もう二度と差し入れにくるな。房に入らば房に従えさ。留置場だって、山スキーの合宿をしているつもりなら、どうってことないよ」

そして、社へのことづけをたずねる私に、こういった。

「部長に、ご心配かけましたが立松を信じて下さい、それだけでいいや」

私がうなずくより早く、刑事課長が合の手を入れた。

「そうだ。さすがはブンヤさん。そうじゃなくっちゃ」

彼はいわゆるノンキャリアだが、所轄署には少ない大学卒で、警察官にありがちな四角四面なところがなく、刑事部屋でとかく敬遠されがちな記者たちに対して、いつも協力的であった。だいいち、自分一人の裁量で、上層部から咎め立てを受けるかも知れない面会を許可するなどは、並の警察官のよくするところではない。

そのはからいから推して彼は、事情はつまびらかにしないものの、高検がとった異例中の異例に属する措置について、どこか釈然としないものを感じ、一肌脱ぐ気になってくれたのである。

彼の合の手のおかげで、われわれを包んでいた沈みがちな空気が一時的にも払われ、立松も気持ちに一区切りついた様子であった。

靖子が用意して来た睡眠薬だけは、さすがに差し入れを許されなかったが、これは当然である。留置場へ戻った立松から届いた伝言は、いかにも彼らしいものであった。

一、この際、誤解を招くおそれがあるので、知り合いの検察関係者を訪ねないこと。

一、今月の給料は前借りで一銭も残っていない。当面の生活費はおふくろに頼め。

一、月末までに質屋の利払いを忘れるな。

あけすけに過ぎるメッセージを筆記しながら、ちょっとした当惑を、取り繕った事務的な表情の下に押し込めようと努めていたに違いない係官を前にして、生真面目な表情で、その実、彼の反応を楽しんでいたであろう立松の姿が、目に浮かぶようであった。

後の二項目は、夫の並はずれた浪費の尻拭いを続けている靖子には、いわずもがなの事柄なのである。

それをわざわざつけ加えたのは、深夜にかけつけて来た仲間へのねぎらいの言葉にかえて、ちよっとおどけてみせたのであらうと、彼の露悪的なサービス精神にふだんに接しているものに